谷崎潤一郎文庫

武州公秘話
蓼喰う虫　盲目物語
蘆刈　春琴抄

六興出版

谷崎潤一郎文庫　八八〇円
第八巻　盲目物語・春琴抄
昭和四十八年　十　月二十日　発行

著　者　谷崎潤一郎
発行者　吉川文子
印　刷　大日本法令印刷
製　本　手塚製本
発行所　六興出版
東京都文京区水道二―九―二
郵便番号　一一二
電話〇三(九四三)三四三一
振替　東京　九二四四八

© 1973　MATSUKO TANIZAKI, Printed in Japan.
落丁・乱丁の本はお取り替え致します

0393-02408-9216

目次

蓼喰う虫　三
盲目物語　一三一
武州公秘話　二〇九
蘆刈　三三五
春琴抄　三六五
注解　四一五
解説　四二九

监修

谷崎松子

野村尚吾

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

蓼喰う虫

その一

美佐子は今朝からときどき夫に「どうなさる？　やっぱりいらっしゃる？」ときいてみるのだが、夫は例の孰方つかずなあいまいな返辞をするばかりだし、彼女自身もそれならどうという心持ちもきまらないので、ついぐずぐずと昼過ぎになってしまった。一時ごろに彼女は先へ風呂に這入って、どっちになってもいいように身支度だけはしておいてから、まだ寝ころんで新聞を読んでいる夫のそばへ「さあ」というように据わってみたけれど、それでも夫は何とも云い出さないのである。

「とにかくお風呂へお這入りにならない？」

「うむ、……」

座布団を二枚腹の下へ敷いて畳の上に煩杖をついていた要は、着飾った妻の化粧の匂いが身近にただようのを感じると、それを避けるような風にかすかに顔をうしろへ引きながら、彼女の姿を、というよりも衣裳の好みを、なるべく視線を合わせないようにして眺めた。彼は妻がどんな着物を選択したか、その工合で自分の気持ちも定まるだろうと思ったのだが、あいにくなことにはこの頃妻の持ち物や衣類などに注意したことがないのだから、――――ずいぶん衣裳道楽の方で、月々何のかのと拵えるらしいのだけれども、いつも相談に与ったこともなければ、何を買ったか気をつけたこともないのだから、――――今日の装いも、ただ花やかな、ある一人の当世風の奥様という感じより外には何とも判断の下しようもなかった。

「お前は、しかし、どうする気なんだ」

「あたしは孰方でも、……あなたがいらっしゃれば行きますし、……でなければ須磨へ行ってもいいんです」

「須磨の方にも約束があるのかね？」

「いいえ、別に。……彼方は明日だっていいんですから」

美佐子はいつの間にかマニキュールの道具を出して、膝の上でセッセと爪を磨きながら、首は真っすぐに、夫の顔からわざと一二尺上の方の空間に眼を据えていた。

出かけるとか出かけないとか、なかなか話がつかないのは今日に限ったことではないのだが、そういう時に夫も妻も進んで決定しようとはせず、相手の心の動きようで自分の心をきめようという受け身な態度を守るので、ちょうど夫婦が両方から水盤の縁をささえて、平らな水が自然と孰方

かへ傾くのを待っているようなものであった。そんなふうにしてとうとう何もきまらない内に日が暮れてしまうこともあり、ある時間が来ると急に夫婦の心持ちがぴったり合うこともあるのだけれど、要には今日は予覚があって、結局二人で出かけるようになるだろうことは分っていた。が、分っていながらやはり受動的に、ある偶然がそうしてくれるのを待っているというのは、あながち彼が横着なせいばかりではなかった。第一に彼は妻と二人きりで外を歩く場合の、――此処から道頓堀までのほんの一時間ばかりではあるが、お互いの気づまりな道中が思いやられた。それに、「須磨へ行くのは明日でもいい」と妻はそう云っているものの、多分約束がしてあるのであろうし、そうでないまでも、彼女に取っては面白くもない人形芝居を見せられるより、阿曾の所へ行った方がいいにきまっていることを察してやらないのも気が済まなかった。

ゆうべ京都の妻の父から、「明日都合がよかったら夫婦で弁天座へ来るように」という電話があったとき、一往妻に相談すべきであったのだが、折あしく彼女が留守だったので、「大概ならばお伺いいたします」と、要はうっかり答えてしまった。それというのが、「僕は長いこと文楽の人形を見たことがありませんので、今度おいでになる時にはぜひ誘っていただきたい」と、いつぞや老人の機嫌を取るために心にもないおあいそを云ったのを、老人の方ではよく覚えていてわざわざ知らしてくれたのであるから、彼としては断りにくい場合でもあったし、それに人形芝居はとにかく、あの老人に附き合ってゆっくり話をするような機会が、ひょっとしたらもうこれっきり来ないであろうとも思えたからだった。鹿ケ谷の方に隠居所を作って茶人じみた生活をしている六十近い年寄りとは、もちろん趣味が合う訳もなし、何かにつけてうるさく通を振りまかれるのにはいつも閉口するのだけれど、若い時にさんざん遊んだ人だけあって何処か洒落な、からっとしたところのあるのが、もうその人とも親子の縁が切れるかと思えばさすがになつかしく、少し皮肉な云い方をすれば、妻よりもむしろこの老人に名残りが惜しまれて、せめて夫婦でいる間に一べんぐらいは親孝行をしておいてもと、柄にないことを考えたのだが、しかし独断で承知したのは手落ちと云えば手落ちである。いつもの彼なら妻の都合ということに気が廻らないはずはないのである。ゆうべも勿論それを思いはしたけれども、実は夕方、「ちょっと神戸まで買い物に」と

いって彼女が出かけて行ったのを、おそらく阿曾に会いに行ったものと推していた。ちょうど老人から電話がかかった時分には、妻と阿曾とが腕を組み合って須磨の海岸をぶらついている影絵が彼の脳裡に描かれていたので、「今夜会っているのなら明日は差支えないであろう」と、ふとそう思った訳なのであった。妻は従来かくし立てをしたことはなかったから、ゆうべは事実買い物に行ったのかも知れない。それをそうでなく取ったのは彼の邪推であったかも知れない。彼女はうそをつくことは嫌いであるし、またうそをつく必要はないにきまっているのだから。が、夫に取って決して愉快でないはずのことをそうハッキリと云うまでもないから、「神戸へ買い物に行く」という言葉の裏に「阿曾に会いに行く」という意味が含まれていたものと解釈したのは、彼の立ち場からは自然であって、悪く感ぐった訳ではなかった。妻の方でも要が邪推や意地悪をしたのでないことは分っているに違いなかった。或いは彼女は、ゆうべも会うことは会っているのだが、今日も会いたいのであるかも知れない。最初は十日おき、一週間おきぐらいだったのが、近頃は大分頻繁になって、二日も三日もつづけて会うことが珍しくないのであるから。

「あなたはどうなの、御覧になりたいの？」

要は妻が這入ったあとの風呂へ漬かって、湯上がりの肌へバスローブを引っかけながら十分ばかりで戻って来たが、美佐子はその時もぼんやり空を見張ったまま機械的に爪をこすっていた。彼女は縁側に立ちながら手鏡で髪をさばいている夫の方へは眼をやらずに、三角に切られた左の拇指の爪の、ぴかぴか光る尖端を間近く鼻先へ寄せながら云った。

「僕もあんまり見たくはないんだが、見たいッて云っちまったんでね。……」

「いつ？」

「いつだったか、そう云ったことがあるんだよ。ひどく熱心に人形芝居を讃美するもんだから、つい老人を喜ばすつもりで合い槌を打ってしまったんだ」

「ふふ」

と彼女は、あかの他人に対するようなあいそ笑いを笑った。

「そんなことを仰っしゃるから悪いんじゃないの。いつもお父さんに附き合ったことなんかないくせに」

「まあとにかく、ちょっとだけでも行った方がいいんだけ

れどな」
「文楽座って一体どこなの？」
「文楽座じゃあないんだよ。文楽座は焼けちまったんで、道頓堀の弁天座という小屋なんだそうだ」
「それじゃどうせ据わるんでしょう？　敵わないわ、あたし、――――あとで膝が痛くなっちまうわ」
「そりゃあ茶人の行くところだから仕方がないやね。――――お前のお父さんも先にはあんなじゃあなかったし、活動写真が好きだった時代もあったんだが、だんだん年を取るに連れて趣味が皮肉になって行くんだね。この間ある所で聞いたんだが、若い時分に女遊びをした人間ほど、老人になるときまって骨董好きになる。書画だの茶器だのをいじくるのはつまり性慾の変形だと云うんだ」
「でもお父さんは性慾の方もまだ変形していないんじゃないの。今日だってお久が附いているでしょう」
「ああいう女を好くというのがやっぱりいくらか骨董趣味だよ。あれはまるで人形のような女だからな」
「行けばきっとアテられてよ」
「仕方がない、それも親孝行だと思って、一時間か二時間アテられに行くさ」
ふと要は、妻が何となく出渋るのは外に理由があるんじゃないのかな、とその時感じたが、
「では今日は和服になさる？」
と、彼女は立って、箪笥の抽出しから、たとうに包まった幾組かの夫の衣類を取り出すのであった。
着物にかけては要も妻に負けないほどの贅沢屋で、この羽織にはこの着物にこの帯という風に幾通りとなく揃えてあって、それが細かいものにまでも、――――時計とか、鎖とか、羽織の紐とか、シガーケースとか、財布とか、そんなものにまでおよんでいた。それを一々呑み込んでいて、「あれ」と云えばすぐその一と組を揃えることのできるものは美佐子より外にないのであるから、この頃のように夫を置いて一人で外へ出がちの彼女は、出かける時に夫のために衣類を揃えて行くことが多かった。要に取って現在の妻が実際妻らしい役目をし、彼女でなければならない必要を覚えるのは、ただこの場合だけであるので、そういう時にいつでも彼は変にちぐはぐな思いをした。殊に今日のように、うしろから襦袢を着せてくれたり、襟を直してくれたりされると、自分たち夫婦というものの随分不思議な矛盾した関係が、はっきり感ぜられるのであった。誰がこう

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

いう場面を見たら、自分たちを夫婦でないと思うであろう。現に家にいる小間使にしても下女にしても、夢にも疑ってはいないであろう。彼自身ですら、こうして下着や足袋の面倒までも見てもらっている自分を顧みれば、これでどうして夫婦でないのかというような気がする。何も閨房の語らいばかりが夫婦を成り立たせているのではない。一夜妻ならば要は過去に多くの女を知っている。が、こういう細かい身の周りの世話や心づくしの間にこそ夫婦らしさが存するのではないか。これが夫婦の本来の姿ではないのか。そうしてみれば、彼は彼女に不足を感ずる何ものもないのである。……

両手を腰の上へ廻してつづれの帯を結びながら、彼はしゃがんでいる妻の襟足を見た。妻の膝の上には彼が好んで着るところの黒八丈の無双の羽織がひろがっていた。妻はその羽織へ刀の下げ緒の模様に染めた平打ちの紐を着けようとして、毛ピンの脚を乳へ通しているのである。彼女の白いてのひらは、それが握っている細い毛ピンを一とすじの黒さにくっきりと際立たせていた。研き立ての光沢のいい爪が、指頭と指頭のカチ合うごとに尖った先をキキと甲斐絹のように鳴らした。長い間の習慣で夫の気持ちを鋭く反射する彼女は、自分も同じ感傷に惹き込まれるのを恐れるかのように殊更隙間なく身を動かして、妻たるもののなすべき仕事をさっさと手際よく、事務的に運んでいるのであるが、それだけに要は、彼女と視線を合わせることなく余所ながら名残りを惜しむ心で偸み視ることができるのであった。立っている彼には襟足の奥の背すじが見えた。肌襦袢の蔭に包まれている豊かな肩のふくらみが見えた。畳の上を膝でずっている裾さばきの袍の下から、東京好みの、木型のような堅い白足袋をぴちりと嵌めた足頸が一寸ばかり見えた。そういう風にちらと眼に触れる肉体のところどころは、三十に近い歳のわりには若くもあり水々しくもあり、これが他人の妻であったら彼とても美しいと感ずるであろう。今でも彼はこの肉体をかつて夜な夜なそうしたように抱きしめてやりたい親切はある。ただ悲しいのは、彼に取ってはそれがほとんど結婚の最初から性慾的に何等の魅力もないことだった。そうして今の水々しさも若々しさも、実は彼女に数年の間後家と同じ生活をさせた必然の結果であることを思うと、哀れというよりは不思議な寒気を覚えるのであった。

「ほんとうに今日は――――」

そう云いながら美佐子は立って、羽織を着せるために夫の背中の方へ廻った。
「――いいお天気じゃありませんか。芝居なんぞには勿体ないくらいだわ」
要は二三度彼女の指が項のあたりをかすめたのを感じたが、その肌触りにはまるで理髪師の指のような職業的な冷めたさしかなかった。
「お前、電話をかけておかなくってもいいのかね？」
と、彼は妻の言葉の裏を尋ねた。
「ええ、……」
「かけておおきよ、でないと僕も気が済まないから、……」
「それにも及ばないんだけれど、……」
「しかし、……待っていると悪いじゃないか」
「そうね、――」
彼女はちょっとためらってから云った。
「――何時頃に帰れますかしら？」
「今から行けば、仮りに一と幕だけとしても五時か六時にはなるだろうな」
「それからじゃあんまり遅いでしょうか？」
「そんなことは差支えないが、何しろ今日はお父さんの都合でどうなるか分りやしないぜ。一緒に晩飯を附き合えとでも云われたら断る訳にも行かないし、……ま、明日にした方が間違いがないよ」
そう云っている時、小間使いのお小夜が襖を開けた。
「あのう、須磨から奥様にお電話でございます」

その二

電話口の話は三十分もかかったけれども、それでも漸く須磨の方は明日にするということになって、一層浮かぬ顔つきをしながら、彼女が夫と珍しく連れ立って出たのは、もう二時半を過ぎた頃だった。
たまに日曜の折などに、小学校の四年へ行っている弘を中に挾みながら、親子三人で出かけることはないでもないが、それは近頃、うすうす父と母との間に何事かが醸されつつあるのを感づいたらしい子供の恐怖を取り除けるためで、今日のように夫婦が二人で出歩くことはほんとうにもう幾月ぶりか分らなかった。弘が学校から帰って来て、父と母とが手を携えて出たことを聞いたら、自分が置いて行かれたのを淋しがるよりも、実はどんなに喜ぶであろう。

――しかし要は、それが子供にいいことだか悪いことだか判断に迷った。ぜんたい「子供子供」と云うが、すでに十歳以上になれば、気の廻り方は格別大人と変ったことはないのである。彼は美佐子が、「外の者は気が附かないのに、弘は知っているらしいんですよ、とても敏感なんですから」と云ったりするのを、「そんなことは子供としてはあたりまえだよ。それを感心するなんかは親馬鹿というもんだ」と、そう云って笑うのが常であった。それゆえ彼は、いざという時は大人に対すると同じように、すべての事情を子供に打ち明ける覚悟をしていた。父も母も、孰方が悪いと云うのではない、もしも悪いと云う者があれば、それは現代に通用しない古い道徳に囚われた見方だ、これからの子供はそんなことを恥じてはいけない、父と母とがどうなろうともお前は永久に二人の子だ、そうしていつでも好きな時に父の家へも母の家へも行くことができる、――彼はそういう風に話して子供の理性に訴えるつもりでいた。それを子供が聴き分けないはずはないと思った。子供だからといっていい加減なうそをつくのは、大人を欺くのと同じ罪悪だと考えていた。ただ万一にも別れないで済む場合が想像せられるし、別れるとしてもまだその時機がきまったという訳ではないので、なるべくならば余計な心配をさせたくない、話はいつでもできるのだからと、そう思い思いつい延び延びになっている結果は、やはり子供を安心させたさに惹き擦られて、喜ぶ顔が見たいために妻と馴れ合いで睦しい風を装うこともあるのである。しかし子供は子供の方で、二人が馴れ合いで芝居をしていることまでも感づいていて、なかなか気を許してはいないらしい。うわべはいかにも嬉しそうにして見せるけれども、それも事によると親たちの苦慮を察して、子供の方があべこべに二人を安心させようと努めているのかも知れない。子供の本能というものはそういう時に案外深い洞察力を働かすもののように思える。だから要は親子三人で散策に出ると、父は父、母は母、子は子という風に、三人が三人ながらバラバラな気持ちを隠しつつ心にもない笑顔を作っている状態に、我から慄然とすることがあった。つまり三人はもうお互いに欺かれない、夫婦の馴れ合いが今では親子の馴れ合いになり、三人で世間を欺いている。――なんで子供にまでそんな真似をさせなければならないのか、それが彼にはひとしお罪深く、不憫に感ぜられるのであった。

彼はもちろん自分たちの夫婦関係を新道徳の先駆者のよう

な態度を以て社会へ触れ廻る勇気はなかった。自分の行っていることには多少の恃むところもあり、良心に恥じる点はないのであるから、まさかの場合は敢然として反抗しないものでもないが、そうかといって、強いて自分を不利な立ち場に置きたくはなかった。父の代ほどではないにもせよまだいくらかの資産もあり、名義だけでも会社の重役という地位もあり、かつかつながら有閑階級の一員として暮らして行くことのできる身として、なるべくならば社会の隅に小さく、つつましく、あまり人目に立たないように、そして先祖の位牌にも傷をつけないようにして安穏に生きて行きたかった。仮りに自分は親戚なぞの干渉を恐れるところはないにしても、自分より一層誤解されやすい妻の立ち場を庇ってやらなければ、結局夫婦は身動きが取れなくなる。たとえばこの頃の妻の行為がありのままに京都の父親にでも知れたら、いかに物分りのいい老人でも世間の手まえ娘の不埒を許してはおけないであろう。もしそうなれば彼女は要と別れたとしても、思い通りに阿曾の所へ行けるかどうかも疑問である。「親や親類の圧迫なんかあたしちっとも恐くはないわ、みんなに義絶されたってかまわないつもりでいるんですから」と、いつもはそう云っているけれども、事実そんなことができるかどうか。彼女について事前に悪い噂が立てば、阿曾の方にも親や兄弟がある以上、そういう方面からの故障も予想せられた。そればかりでなく、母が日蔭者のようになっては、それが子供の将来に及ぼす影響も考えなければならない。要はいろいろの事情を思うと、別れた後にも互いが幸福に行けるようにするには、よほど上手に周囲の人たちの理解を求める必要があるので、平素から用心深く世間に気取られないようにしていた。夫婦はそのために少しずつ交際の範囲を狭くし、努めて牆の内を覗かれないようにさえした。が、それでもやはり対社会的に夫婦らしさを装わなければならない場合が生じて来ると、いつもあんまりいい心持ちはしないのであった。

思うに美佐子がさっきから変に出渋っていたのも、一つはそれがいやなのであろう。気の弱い性質なのではあるが、何処か奥の方にカチリと堅い芯を持っている彼女は、古い習慣とか、義理とか、情実とか、そういうものに対してはむしろ要よりも勇敢であった。彼女は夫と子供のためにできるだけ慎しんではいるものの、しかも今日のような時に進んで人の前へ出てまで芝居をするには及ばないという風

な、かすかな不平を抱いているに違いなかった。なぜなら彼女にしてみれば己れを欺く世を欺くのが不愉快であるばかりでなく、阿曾の感情をも考えなければならないからだった。阿曾も事情は認めているにしろ、彼女が夫と道頓堀へ出かけたと聞いたらとにかく愉快であるはずはない。真に已むを得ない場合の外は、そういうことは遠慮して欲しいに違いない。夫はそこまでの思いやりがないのか、察していてもそんなことにまで気がねをしてはいられないという腹なのか、そうとはっきり口へ出しては云えないだけに彼女はもどかしく感ずるのであった。夫は何ゆえに今ごろになって老人の機嫌を取ろうとするのか。彼女の父が夫に取っても永久に父であり得るならば知らぬこと、もう近々に「父」と呼ぶこともできなくなるのに、それを今更附き合ったところで無益ではないか。なまじ孝行の真似などをすれば後で事実が知れた時に一層怒らせるようなものではないか。

夫婦はそんなふうに別々の心を抱いて阪急の豊中から梅田行きの電車に乗った。三月末の彼岸ざくらが綻びそめる時分のことで、きらきらしい日ざしの底にまだ何処となく肌寒さが感ぜられたが、要はうすい春外套の袂の外へこぼれている黒八丈の羽織の生地が、窓の明りで干潟の沙のように光るのを見た。和服の時は寒中でもシャツを着けないのを身だしなみの一つにしている彼は、長襦袢の裏と皮膚とのあいだに清涼な風の孕むのを覚えながら内ぶところへ両手を入れていた。車の中は時間が半ばであるせいか疎らな客がめいめいゆっくりと席を取り、真新しい白ペンキの天井の下は空気が隅まで透き徹っていて、並んでいる人たちの顔までが皆健康そうに、朗らかに明るい。美佐子はそれらの顔の中にわざと夫と向い側にかけて鼻のあたまを毛皮の襟巻のふかふかとした中へ埋めるほどにして、縮刷本の水洙集を読んでいるのである。買い立ての白クロースの、ブリキのようにピンと尖った表紙の背を摑んでいる指には網目に編んだサファイア色の絹の手袋が篏まっていて、こまかい網の目の隙間から、研かれた爪がチラチラと覗いていた。

電車の中で彼女がこういう位置を取るのは、それがほとんど二人で外出する時の習慣のようになっていた。子供がいればその右左へかけるけれども、そうでなかったら大概の場合、一人が腰をおろすのを待って一人が反対の側の方へ席を求める。夫婦は互いに衣を隔てて体温を感じ合うこと

が窮屈であるばかりでなく、今では寧ろしてはならないことのように、不道徳なようにさえ思うのである。そして一つの車室のうちに向い合って置かれるだけでも相手の顔が邪魔になるので、美佐子はいつも眼の向けどころを作るために何かしら読むものを用意していて、席がきまるとすぐに自分の鼻先へ屏風を立ててしまうのである。二人は梅田の終点で降りて別々に持っている回数券を渡して、申し合わせたように二三歩離れて歩きながら駅の前の広場へ出ると、夫が先に、妻がその後から黙ってタキシーの箱の中へ収まって、始めて夫婦らしく肩を並べた。もし第三者が四つのガラス窓の中に閉じ込められた彼等を見たなら、二つの横顔が額と額と、鼻と鼻と、頤と頤とを押絵のように重なり合わせて双方が脇眼をふることなく、じっと正面を切ったままで車に揺られつつ行くさまに気づいたであろう。

「何をやっているんですの、一体?」

「ゆうべの電話では小春治兵衛と、それから何だとか云っていたっけが、……」

互いに長い沈黙に圧し出されたような工合に、一と言ずつ口をきいた。けれどもやはり正面を切ったままだった。妻には夫の、夫には妻の、鼻の頭だけが仄白く映った。

弁天座のありかを知らない美佐子は、戎橋で乗り物を捨ててから再び黙って附いて行くより外はなかったが、夫は電話で委しく教わったものと見えて、道頓堀のとある芝居茶屋を訪ねて、そこから仲居に送られて行くのである。いよいよ父の前へ出て妻の役目をしなければならない、そう思うと彼女は一層気が重くなった。土間へ陣取って娘よりも若いお久を相手に、杯のふちをなめては舞台の方を見入っている年寄りの姿が眼に浮かんだ。父もうっとうしいけれども、それよりお久がいやであった。京都生れの、おっとりとした、何を云われても「へいへい」云っている魂のないような女であるのが、東京ッ児の彼女と肌が合わないせいもあるであろう。が、お久というものを傍へ置くとき、父が何だか父らしくなく、浅ましい爺のように見えて来るのがこの上もなく不愉快なのである。

「あたし一と幕だけ見たら帰るわよ」

と、彼女は木戸口を這入りながら、そこまでびんびんと響いて来る時代後れな太棹の余韻に反抗するような気持ちで云った。

茶屋の女に送られて芝居小屋へ来るということが、すでに何年ぶりであろう。要は下駄を脱ぎ捨てて足袋の底に冷め

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com